

第五回 唐子浜の赤灯台

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第5回は、唐子浜の赤灯台（旧、コノ瀬灯標）について紹介し、来島海峡の近代航路整備を歴史散歩したいと思います。

●歌と絵本の題材にもなった赤灯台

今治市民から「赤灯台」と親しまれるそのモニユメントは、唐子浜の沖合約二三〇メートルの場所にあります。海図には「灯台状構造物」と記され、海事関係者が灯標と間違わないよう配慮がされています。

昭和五三（一九七八）年三月に七六年間の業務を終え、来島海峡のコノ瀬暗礁から



唐子浜の赤灯台
（背景は燈灘の平市島）

同年一〇月に移設されました。役目を終えた灯台・灯標を、海へ移築保存する例は極めて珍しく、海事都市・今治にとっては貴重な歴史文化遺産です。

さらに、この「赤灯台」にちなんだ歌『赤灯台のうた』（作詞・丘灯至夫、作曲・古関裕而、一九八二）と絵本『赤い灯台』（文・大西伝一郎、絵・赤坂三好、文芸社、一九九七）も存在しています。

●赤灯台の誕生と役割

「赤灯台」は、いつ、どのような目的で誕生したのでしょうか。来島海峡の航路整備が本格的に実施されるのは、明治三〇年代が最初です。これは、増え続ける通航船舶に対応したもので、明治三三（一九〇〇）年四月二〇日に中渡島灯台（白色）、同三五年四月一日に大浜灯台（白色）とコノ瀬灯標（赤色）が業務を開始しています。

同航路はZ字に屈曲し、島々が視界を遮ることから、中渡島と大浜の灯台位置を知ること、針路変更の助けとなりました。

一方、コノ瀬灯標の役割は、小島の北東沖合にあったコノ瀬暗礁の位置を通航船舶に知らせ、座礁の危険を防ぐことでした。コノ瀬は、満潮時の水深が二メートル前後しかなく、ここへ灯標を設置することで、海峡西口付近の航路幅の指標になりました。

●三灯台それぞれの道

その後の航路整備等によって、中渡島灯台と大浜灯台には腕木式信号機が備わり、潮流信号所の業務を併せ持つようになりま

す。中渡島潮流信号所は、現在も腕木式信号機が潮流情報を通航船舶に伝えており、これは国内で唯一の事例です。

中渡島灯台とコノ瀬

灯標の構造が円形石造であるのに対し、大浜灯台は六角形鉄骨造でした。昭和三八（一九六三）年に大浜灯台の灯塔は解体撤去され、現在の潮流信号塔に新調されました。また、不用となった灯台官舎（煉瓦造）は、昭和五六（一九八一）年に唐子浜へ移築保存され、「海の子の家」に生まれ変わります。

一方、昭和四〇年代後半になると、来島海峡の通航船舶が一日一〇〇〇隻に迫り、船舶のサイズも大型化します。そこで、航路幅を拡張するため、コノ瀬暗礁の除去工事にもなつて、コノ瀬灯標の撤去が計画されたのです。

ところが、これを惜しむ市民の反響は大きく、今治地方観光協会長・赤穂義夫氏（故人）らを中心に保存運動が展開され、今日へと至ります。



小島の北部砲台跡とコノ瀬灯標
（昭和初年頃の絵葉書）